

▼書評

藤原辰史著 『カブラの冬』

—— 第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆 ——

(人文書院、二〇二一年、一五四頁、一五〇〇円＋税)

服部 伸

本書は、シリーズ「レクチャー第一次世界大戦を考える」の一冊として出版された。このシリーズは、第一次世界大戦をめぐる問題化されるさまざまなテーマを、広く一般の読者に対して平易に概説するものであるが、同時に、京都大学人文科学研究所の共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」の中間的な研究報告としての性格を併せもつ。この共同研究では、第一次世界大戦によって「現代世界」の基本的枠組みが生まれたという仮説を、地域や学問領域を超えて総合的に検討しているが、同時に、第一次世界大戦に至る時期の社会や文化の中に、すでにその兆候が現れてきているということが共通の理解となっている。この枠組みの中で、著者の関心は、ヨーロッパの大国に成長していたドイツで、第一次世界大戦下で発生した飢饉の内実を確認するとともに、この飢饉経験がどのようにナチスの政策に結実したかを明らかにすることにある。

ところで、タイトルにもある「カブラ」はスウェーデンが原産とされる、英語名でルタバガというアブラナ科セイヨウアブラナ種の変種で、日本で食するカブとは異なる。ジャガイモよりも糖分と脂肪分を多く含み、ロシア、北欧、ドイツ北部で栽培されたが、水分が大半を占め

て味も悪いため、次第に飼料として使用されるようになった。

以下で本書の内容を簡単に紹介しよう。一章では、第一次世界大戦中のドイツ国内で多数の餓死者を出した原因を考える。まず、イギリスの海上封鎖が、直接の戦闘を避けつつ、交戦国であるドイツ文民の弱体化を狙ったものであり、他方、短期決戦を予想していたドイツ側はイギリスの作戦に十分対応しなかった。

しかし、被害が拡大したのは、ドイツの国内事情によることも大きい。近代工業国となったドイツでは農産物や肥料を輸入に依存していた。最大の食糧輸入先ロシアがドイツの敵国となり、南北アメリカとの通商ルートはドイツの命脈となったが、イギリスはこれを断ち切った。しかも、国内での農産物増産は不可能だった。耕作に必要な馬が軍用に徴用されたうえ、男性農民の多くは動員され、ロシア領内からの農業労働者も確保できなくなった。また、南米からのグアノや硝石が途絶えたことで、窒素・リン酸肥料が不足し、肥料の確保も難しくなった。

第二章と第三章は、戦時下の食糧をめぐる人々の日常を描写する。輸入が途絶えたうえに、国内の農産物生産も低下して、絶対的な食糧不足が起こる。一つの対策は、民衆食堂である。しかし、ここで与えられる食事は質が低く、利用者からの評判は悪かった。何としても食料を入手するためにはヤミでの購入も行われた。農業生産者はヤミでの取引の方が多くの利益を得ることが可能なため、農産物の多くをヤミ市場に流した。その結果、ヤミでの取引が可能な富裕層と、配給や集団給食所に頼らなければならぬ貧困層の格差が広がった。

ジャガイモを混ぜたKパンに代表されるような代用食も開発された。食糧確保のために、種から脂肪分を搾り、野生植物や昆虫を食用や飼料用に採取した。また、台所の生ゴミを家畜の飼料として集めることも求められるよ

うになった。さらに、都市近郊では家庭菜園が増加し、野菜や果樹を植えた。

行政による食糧政策は機能しなかった。食品価格の安定化を狙った価格統制は、最高価格の制限がジャガイモや穀物に限定されたため、農業経営者はジャガイモや穀物を豚の飼料に回し、豚を高価格で販売した。また、価格設定は各自自治体に任ざれていたため、地域による価格差が生じ、投機を招いた。富裕層に生活必需品が集中することを防ぎ、公平・安価に分配を目指すために配給制も導入された。しかし、配給量の減少により、密商の暗躍を招き、一層供給量は減少した。

地域ごとの食糧管理によって状況が一層混乱する中で、一九一六年五月に戦時食糧庁が設置され、国家による二元的な食糧管理が試みられた。しかし、生産者側と消費者側の板挟みにあつて同庁は身動きが取れなくなつたうえに、軍部は強権を發動して兵士の食糧や軍馬の飼料を徴用した。このため、この機関は十分に機能を發揮することはなかつた。

食糧危機はさらに深まり「豚殺し」が始まる。豚肉はドイツで最も好まれた肉であつたが、飼料消費は人間の二倍以上であり、飼料を人間の食用に回すことで、食糧を確保しようとしたのである。しかし、この政策の前提となつたのは、炭水化物と動物性タンパク質の違いを考慮しない単純なカロリー計算であつた。一九一五年春に豚の屠殺が全国的に行われた結果、一時的には豚肉が市場に出回つたが、全ての肉を加工することはできず、多くの豚肉が廃棄された。その後によつてきたのは国民のタンパク質・脂肪不足であつた。

「豚殺し」で食糧危機は一層深刻化した。多くの農民が、家畜飼料の高騰を理由に、食用のジャガイモから飼料用のルタバガに作付けを転換したため、一九一六年にはジャガイモの収穫高が激減し、同年秋にドイツは飢饉状態に陥つた。人々はルタバガを食べるしかなくなつたのであ

る。こうして「カブラの冬」が到来した。ルタバガは評判の悪い食材であつたが、さまざまなルタバガ料理が考案されて、食用に利用された。飢饉下で女たちは食料を得るために行列を作り、あるいは互いに争つた。生き延びようとする努力が犯罪に手を染めることになり、子どもの栄養失調・餓死と窃盗犯罪が増加した。いたるところで法と宗教の良俗が完全に崩壊する状態になつたのである。

第四章では、食糧政策に不満をもつ民衆は革命へと突き動かされていくさまが描かれている。食糧政策の破綻により、戦前からの法の下の不平等が可視化されるようになり、ひとびとは社会矛盾を認識するようになった。持たざる者たちの不満は戦時の「城内平和」を崩した。日々の食料を求めて行列を作る民衆は、時には女性や子どもたちが商品を奪い合い、食料騒動が発生することもあり、治安当局は、こうした騒動が飢餓暴動へと拡大することを恐れた。

現状に対する不満を募らせた民衆は、政治体制の変革を求める主張が現れるようになった。食糧問題を解決できない政府に対して民衆は疑念を抱き、プロイセン邦の三級選挙制度の廃止を求めるようになった。一九一七年にヴェルヘルム二世は不平等選挙法改革を約束したが、その理由のひとつは食糧状況の悪化があつた。食糧をめぐる不満は銃後だけの問題ではなかつた。海軍の軍艦内では将校の豪華な食事と、一般民衆と代わらぬ水兵の粗末な食事との格差が大きく、食料格差に抗議する水兵のハンガーストライキが起こつた。この動きはドイツ革命に直接繋がるわけではないが、革命の震源の一つが、食生活の不平等がとりわけ可視化された海軍に存在することを示すものである。

第五章は、第一次世界大戦中の飢餓経験がナチズムへと継承されていることを明らかにする。大恐慌下に、ナチスは、銃後での犠牲者であつた

女性と子どもにスポットを当てた反飢餓キャンペーンを行い、生活への不安が高まる民衆に飢餓の記憶を呼び覚ませさせた。

そして、政権奪取後のナチスの農政は、貿易に頼らずに食糧自給をめざした。そのために、生産・流通・消費の準戦時体制化を試みた。生産に関しては、生産戦というキャンペーンを張って技術改良・増産の意欲を高めるとともに、農業生産状況の国家一元管理を実現した。流通に関しては、最低生産者価格を設定するとともに、農家に穀物供出を義務づけ、穀物市場も統制した。また、食品流通業者も農業組織にまとめられ、国家の干渉を受けた。消費に関しては、「無駄をなくせ闘争」で生活を統制し、生ゴミを組織的に飼料として利用する制度を構築した。

それでもドイツは食糧の完全自給を達成することはできなかった。そこで東方のユダヤ人・ポーランド人を追放・奴隷化して、ドイツ人を入植させ、食糧を安定的に供給させようとした。この計画は未完に終わったが、これも第一次世界大戦中の計画を引き継ぐものであった。

以上のように、本書は、第一次世界大戦中にドイツで起こった飢饉の原因を当時の英独の軍事戦術面とドイツ国内の食糧事情面から確認したうえで、第一次世界大戦中の飢饉下での民衆の日常生活を具体的に描くとともに、当局が有効な対策を打つことができません。民衆の不満が募ってゆく経緯をあきらかにしている。そして、政府の食糧政策失敗に対する民衆の怒りがドイツ帝国の体制を突き崩す力となっていくとともに、他方では、飢饉に関する彼らの記憶をナチスは巧みに利用して政権を獲得し、ナチスの軍事戦術や食糧政策が、第一次世界大戦の失敗を教訓にしていたと指摘している。

本書の第一の特徴は、著者が「はじめに」で記しているように、第一次世界大戦中のドイツで発生した飢饉の内実を明らかにしていることである。これまでも食糧事情が逼迫していたことは多くの研究でも触れら

れてきたが、真正面からこの問題に取り組んだ意義は大きい。概説書の限られた紙幅の中で、ドイツの食糧事情の構造的問題を手際よく整理したうえで、平明な文章で第一次世界大戦中の飢饉の実情が多くのエピソードを交えて活写される。とくに興味深いのは、構造だけを問題にするのではなく、民衆の心性、特に主体性について注目していることである。この点でも第一次世界大戦の失敗に学んだナチスが、民衆の主体性を取り入れつつ、食糧問題を解決しようとしていたことが明らかになる。

本書の第二の特徴は、第一次世界大戦中のドイツにおける飢饉が、その後のドイツ革命、ナチス政権にもつながっていることを示したことである。これまでの研究でも、海軍において将校と水兵の待遇に大きな差があつて、とくに水兵たちの食事をめぐる日常的な不満が、彼らをドイツ革命に駆り立てた要因の一つであったことは指摘されてきた。また、銃後においても食糧問題が逼迫し、民衆の政府に対する不信感を強めることになったことも知られた事実である。

しかし、これほど明確に、第一次世界大戦からドイツ革命、ヴァイマル期を経てナチスに至る経緯を、食糧問題と関連づけて説明してきたものはこれまではなかった。しかも、その射程がドイツ史だけにとどまるものではなく、世界的な広がりをもっているのである。本書の冒頭では、第一次世界大戦期から第二次世界大戦期にかけて、さまざまな日本人専門家がドイツの飢饉に注目していたことが紹介されている。十分に食糧を自給することが難しかった日本にとつても、先進工業国ドイツが陥った惨状は他人事ではなく、その経験を学んで、第二次世界大戦の遂行に生かそうとした。また、飢饉への恐怖と、「敵」を遠隔操作で消し去る暴力感覚は、今日に至るまでの現代人の精神の基調であるならば、われわれは、第一次世界大戦下ドイツでの飢饉の呪縛から、未だに脱し

ていないことになる。結果的に、本書は、食糧問題という一本の線で、第一次世界大戦から現在への連続性を浮かび上がらせたことになる。

ドイツ近代史の文脈で、第一次世界大戦からナチ期を経て戦後への連続性を唱えるという著者のテーゼは、フィッシャーやヴェーラーの議論との類似性として理解されるかもしれない。しかし、著者のテーゼに関して、注意しなければならない点が二つある。第一点は、本書での議論がドイツの一国史的な枠内にとどまるわけではないことである。すなわち、本書の議論はフィッシャーやヴェーラーなどが主張するような近代ドイツの「特殊な道」とは異なる方向へと向かっている。彼らはドイツの後進性がナチズムを生み出したことを明らかにしようとしたが、本書で明らかにしようとしたのは、ドイツにおける飢饉の経験が、その後の世界で共有されていたということであり、ドイツ史を世界史の中で普遍化しようと試みているのである。

そして、これと関連して、第二点として、食糧確保という観点から見た場合に、ドイツが農業国から工業国へと移行した先進的な国家だったからこそ、食糧問題が深刻化し、究極的にはナチスを生んだことになる」と指摘していることである。すなわち、経済大国かつ科学技術大国に成長したドイツは、交通が発達したことによって物流が活性化し、食料と飼料の輸入大国にもなっていた。もちろん、非民主的な選挙制度や硬直した官僚制度など、後進的あるいは権威主義的なシステムゆえに民衆の不満が募ったことも著者は指摘しているが、ドイツの先進性にこそ食糧問題の重大な落とし穴があったことが強調されている。

このような本書のテーゼは、『社会国家の生成』（岩波書店、二〇〇四年）などの研究で、福祉をめぐる問題における帝政後期、第一次世界大戦、ナチス期を経て戦後への連続性を浮かび上がらせた川越修の主張と

近い位置にある。そして、本研究の母胎となった京都大学人文科学研究所の共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」の作業仮説の妥当性を検証することにも成功している。

他方で、本書に弱点があることも指摘しておきたい。川越は、一連の研究を通して、帝政後期には社会問題を解決するために社会国家のシステム構築に向けた準備が始まり、これが第一次世界大戦を経て戦間期に制度として機能するようになったことを浮き彫りにしている。つまり、ナチス期を経て戦後に至る連続的な歴史の局面は、帝政後期に始動したことになる。ところが、本書では、戦時中の衝撃を確認して、第一次世界大戦からナチス期への連続性が強調されるものの、帝政期から第一次世界大戦に至る連続性についての十分な議論がなされなかった。

お節介な気もするが、この点について評者なりの展望を示しておく。本書でもたびたび指摘しているように、第一次世界大戦下では食を通して貧富の差が可視化されていた。そして、この不公平を取り除くための方策が、「民衆食堂」や配給だった。ことに食料配給は、必要最低限の生活を国家が国民に保障するための制度であり、福祉の原点であったとも言える。したがって、食糧問題の歴史は、福祉史の一部となり、川越のテーゼと接合することで、先に述べた本書の不足を補うことができるのではないかと。本書でも、「民衆食堂」などの活動が、すでに帝政期に貧民救済として存在し、「平時の貧困問題の延長」として位置づけられる」と指摘されている。また、本書では全く言及されていないが、帝政後期に大都市で普及する貧困児童向けの給食などが第一次世界大戦期にはどのように展開するのか。こうしたことを突破口とすれば、帝政期も視野に入れた叙述の展望が開けるのではないかと。

（はっとり おさむ・同志社大学教授）